

# 『源氏物語』の和歌を読む（六）

加藤 睦

## 一

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこともに立ちくる心地して、涙落つともおほえぬに枕浮くばかりになりけり。琴をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすごく聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん

（須磨巻<sup>1</sup>）

この「恋ひわびて…」詠については、第四句「思ふかたより」について、

○私を恋しく思う人々のいる都の方から

○私が恋しく思う都の方から

という二様の解釈が行われている。

このうち前者の立場をとって、一首を、

恋しさに堪えかね泣く声かと聞える浦波の音は、わたしのことを思っている人たちのいる都の方から風が吹いてくるせいであろうか。

（新編全集）

というように解釈する場合、浦波の音（泣き声）と風の関係については、都の人々が泣いている声を風が運んで来るということで筋が通るが、「涙落つともおほえぬに…」と語られた、都を思う源氏自身の心情は全く表出せず、都の人々が自分を恋しく思う心情を専ら詠んでいることになり、やや不自然な解釈になるといえる難がある。

後者の立場をとる場合は、「思ふ」に源氏自身の心情が明示されていることになり、また、「恋ひわびてなく音」も源氏自身の泣き声を意味することとなって、詠歌状況に適合した自然な理解となる。ただし、上の句の「恋ひわびてなく音にまがふ浦波」という事実と、下の句の「思ふかたより風や吹くらん」という推量の関係が、把握しにくいという難点が生ずる。

・浦波の音が、恋ひわびて泣く自分の声に似てゐるのは、恋しいもののある方から風が吹くからであらうか。

（全書）

・都（の人）恋しさに寂しさと悲しさに悩んで過（こ）して、私が泣いて居る音に、似通（に）つて居る浦浪の音は、私の恋しく思う都の方から吹いて来る風による波であろうか。（大系）  
・都に残した女たちを思う自分の気持から、浦波が悲しく聞えるのであろうか、の意。

（集成）

右に見るように、全書、大系は、浦波の音と風との関係を特に説明していない（できていない）。これに対し、集成は、源氏自身の心理に基づく関係づけを行っている。

恋しさに堪え切れずに泣く泣き声のように、須磨の浦の波音が聞こえるのは、我が思う都の方から風が吹いて来て、都人の悲しみの声を運んでくるからであらうか、の意。（新大系）  
という解釈は、「思ふかた」を「我が思う都の方」としながら、風については、「都人の悲しみの声を運んでくる」風とする折衷案。上野理氏が次のように解説するの、同様の解釈と判断される。

光源氏の独詠は、（中略）自分が思う都の方より吹く風によって立つ浦波故に、都の人々の思いを伝えているからか、と思入る形で郷愁を歌う。浦波は都の人々の泣き声であり、光源氏は自分の泣き声と自分の空想する都の人々の泣き声との交響を聞いているのである。

集成や新大系のような解釈は、それぞれよく考えられた解釈といえることができるが、その苦心の分だけ和歌の原文から乖離している印象はぬぐえない。

上の句の「恋ひわびてなく」も下の句の「思ふ」も、ともに源氏の心情を表現したものとみるのが自然であることは間違いない。

い。

……歌……とうたひたまへるに人々おどろきて、めでたうおぼゆるに忍ばれで、あいなう起きぬつつ、鼻を忍びやかにみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身ひとつにより、親兄弟、片時たち離れがたくほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かくまどひあへると思すに、いみじくて、……

と続く行文も、当該歌が、都人の心情ではなく源氏自身の心情を表出したものであることを裏打ちする。

したがって、一首を訳出すれば、

私が都を恋いわびて泣く声に聞き紛う浦波が立っているのは、恋しく思う方角から風が吹いてくるのだらうか。

というのが妥当な解釈ということになるが、その場合の、「都を恋いわびて泣く声」と「恋しく思う方角から風が吹いてくる」ととの関係を了解するためには、集成や新大系のように一首の内部で合理化するのではなく、当該歌の外部にあるものを参照する必要があるように思う。それは、

胡馬ハ北風ニ依リ 越鳥ハ南枝ニ巢クフ

（文選・卷二十九・古詩）

という詩句である。この句は当該歌と同じ須磨巻で、

かくかたじけなき御送りにとて、黒駒奉りたまふ。「ゆゆしう思されぬべけれど、風に当たたりては嘶えぬべければなむ」と申したまふ。

というように引かれてもいるよく知られていた句である。

新編全集は、この詩句の前半部について、次のように説明している。

「胡馬ハ北風ニ依リ」を『河海抄』などに「胡馬ハ北風ニ嘶エ」のかたちで引く。「駒はもと胡国の獣也。仍北風にあれば旧里を慕ひていばゆる也」(河海抄)。

胡馬は「北風にあたれば旧里を慕ひていばゆる」。須磨浦の波は、それ自体都を慕うはずはないのだが、源氏は、その波の音に自身を投影し、須磨浦の波が都を慕って泣いているように聞こえるのは、都の方角から風が吹いているためだろうか、ととりなしているのである。

## 二

二条院の御前の桜を御覧じても、花の宴のをりなど思し出づ。

「今年ばかりは」と独りごちたまひて、人の見とがめつべければ、御念誦堂にこもりゐたまひて日一日泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが鈍色なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど、いどものあはれに思さる。

入日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる

(薄雲巻)

人聞かぬ所なればかひなし。

藤壺の死を悼んで源氏の詠んだ独詠歌「入日さす…」について、諸注は一致して「もの思ふ袖」＝「喪服の袖」という理解を示し、一首を次のように解釈している。

夕日のさす峰にたなびく薄雲は、悲しみにくれている私の喪服の袖に色を似せているのだろうか、の意。  
(新大系)

確かに当該歌の「峰にたなびく薄雲」は、直前の叙述に「雲の薄くわたれるが鈍色なる」とあることと照応しており、「もの思ふ袖」を「喪服の袖」と解することには問題がなさそうに見える。けれども、こうした解釈には、「入日さす」と詠まれ、「夕日はなやかにさして」と語られている、夕日の色のことが抜け落ちているのではないだろうか。

新編全集は、地の文の「鈍色」について「喪服の薄墨色。来迎の折の紫雲の連想がある」と注し、夕日の色についても配慮しているが、歌の解釈においては、「悲嘆にくれている私の喪服の袖に色を似せているのだろうか」というように、やはり夕日の色が脱落している。

「入日」「夕日」の色は、次の用例でわかるように、紅葉や躑躅の色に通うものとされ、「くれなゐ」と表現される。

- ・入日さすみねの木のはと見えつるはもみぢの色のてるにぎりける (大式高遠集・一四九・「又、大井にて」)
- ・いりひさすゆふくれなゐのいろはえて山したてらすいはつつじかな

(金葉集二度本・八四・撰政家参河・「晚見躑躅といへる」とをよめる)

- ・くれなゐに立つしらなみの見えつるはやまのあなたのいりひなりけり (玄玄集・一五五・實業・「高砂」)

この「くれなゐ」の夕日に照らされた峰にたなびく「鈍色」の雲と、「もの思ふ袖」とが重なり合うところに浮かびあがるのは、『源氏物語』作中歌にも次のように詠まれる「くれなゐ」の涙、すなわち紅涙であろう。

・くれなゐの涙にふかき袖の色をあさみどりと言ひしをるべき  
(少女卷)

・くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり  
(総角卷)

直前の叙述で、源氏が悲嘆にくれる様子が、「御念誦堂にこもりゐたまひて一日泣き暮らしたまふ」と記されていることに注意したい。

通説がそう解しているように、「もの思ふ袖」の色が源氏の喪服の色だけを表しているのであれば、

おさめたてまつるにも、世の中響きて悲しと思はぬ人なし。  
殿上人などなべて一つ色に黒みわたりて、ものの榮なき春の暮なり。

とあるように、一様に喪に服している殿上人たちと共通した色になつてしまふだろう。そのような「なべて」の色から隔絶した、源氏固有の「もの思ふ袖」の「色」とは、薄墨色の喪服の袖が紅涙に染まる色と考えるのが妥当である。

### 三

御前近き呉竹の、いと若やかに生ひたちて、うちなびくさまのなつかしきに、立ちとまりたまうて、

「ませのうちに根深く植ゑし竹の子のおのが世々にや生ひわかれるべき」

思へば恨めしかべいことぞかし」と、御簾をひき上げて聞こえたまへば、ゐざり出でて、

「今さらにいかならん世か若竹の生ひはじめけむ根をばたづねん」

なかなかこそはべらめ」と聞こえたまふを、いとあはれと思しけり。  
(胡蝶卷)

この「ませのうちに…」の歌は、「中年を過ぎようとする源氏の慕情と諦念のこめられた歌」(新編全集)と解説されるのが通例で、たとえば次のように解釈されている。

・自分(源氏)のませ垣の中に、自分がかつて根を深く植ゑた竹の子が―自分の手もとに、大切に育てた子(玉鬘)が、自分の手から離れ(他人のものとなつて)自分自分の世界に生い立って別れて行くのであろうか。  
(大系)

・邸の奥でたいせつに育てた娘も、それぞれ伴侶を得て出てゆくわけ。  
(玉上評釈)

・籬のうちにしっかりと植ゑた筍―邸のうち深く大切に育てた娘が、それぞれすがを定めて別れてゆくのであろうか。  
(集成)

しかしながら、「根深く植ゑし」という表現は、血縁関係の比喻として理解するのが自然であり、最近出会った玉鬘を、源氏が「邸のうち深く大切に育てた娘」と表現するとは思われない。<sup>3)</sup>

当該歌に先立つて、源氏は玉鬘への求愛者たちをあれこれと論評している。玉鬘が自分のもとから離れて行くことの嘆き(嫉妬)を諸注が読みとるのは、そのためだろうが、源氏の話題は、求愛者のことから、いつしか自分と玉鬘の關係に移って、次のようなやりとりが行われている。

・まろを昔ざまになずらへて、母君と思ひなしたまへ。(源氏)  
・親などは見ぬものにならひはべりて、ともかくも思うたまへられずなむ。(玉鬘)

・後の親をそれと書いて、おろかならぬ心ざしのほども、見あらはしはてたまひてむや。

このように、実の親と後の親を対比してやりとりされた会話を受けて詠まれた当該歌において、「根深く植ゑし」という表現で示されているのは、源氏と玉鬘の關係ではなく、実の親＝内大臣と玉鬘の關係のほうであると考えるのが自然であろう。

後年、玉鬘は、光源氏を「岩根」にたとえ、

若葉さす野辺の小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな  
(若菜上巻)

という歌を詠んでいるが、それは、長い歳月の蓄積を経て、光源氏を親として遇した歌と解される。当該歌が詠まれた時点において、「ませのうちに根深く植ゑし」の主語が源氏であるとは、やはり考えにくい。

「おのが世々」も、「それぞれ伴侶を得て」「それぞれさすがを定めて」と解せるかどうか、はなはだ疑問である。特に「それぞれ」というのは、複数の娘を思つての言葉となり、詠歌状況からの乖離は避けられない。

「おのが世々」という言葉は、  
ふえ竹の本のふるねはかはるともおのがよよにはならずもあらなん

(後撰集・恋五・九五四・よみ人しらず・「たかあきらの朝臣にふえをおくるとて」)

のように、男女(夫婦)が別れ別れになって別々の人生を生きることを表すのが普通であるが、

しほのまにあさりするあまもおのが世世かひ有りとこそ思ふべらなれ

(後撰集・恋三・七五八・はせをの朝臣・「心ざしありていひかはしける女のもとより、人かずならぬやうにいひて侍りければ」)

のように、男女の愛情關係とは切り離して、「それぞれの人生」の意を表すこともできる表現である。

当該歌の「おのが世々にや生ひわかるべき」は、「根深く植ゑし」の意味するところと合せて考える時、「実の親の内大臣から遠く離れて育つて来た玉鬘だが、親子の絆は切れるものではなく、結局は再会を果たし、本来の親子關係に戻るであろう」ということを意味しているものと理解される。

以前、源氏は玉鬘に向かって、

おのづから、さて人だちたまひなば、大臣の君も尋ね知り聞こえたまひなむ。親子の御契りは絶えてやまぬものなり。

(玉鬘巻)  
と語ったことがある。当該歌は、その同じことを、「後の親」のうらめしさもこめて詠んだものと解されるのである。

玉鬘の返歌、

今さらにいかならん世か若竹の生ひはじめけむ根をばたづねん

について、新編全集は、

源氏の歌の下句は、玉鬘が自分から去って人の妻になるの

だろうか、の意であるが、玉鬘は、それを内大臣のもとに行くのだろうか、の意に解し、後の親（源氏）を父と思い、内大臣の所へは行きません、の意で返した。

と解説し、やや複雑な切り返しの歌と解しているが、実際は、源氏の贈歌にすなおに応じ、源氏の心を慰めた歌と理解するのが妥当である。

#### 四

……この世に目馴れぬまめ人をしも、「これぞなこれぞな」とめでて、ささめき騒ぐ声いとしるし。人々と苦しと思ふに、声いとさはやかにて、

「おきつ舟よるべなみ路にただよはば棹さしよらむとまり教へ

よ

棚無し小舟漕ぎかへり、同じ人をや。あなわるや」と言ふをいとあやしう、この御方には、かう用意なきこと聞こえぬものと思ひまはすに、この聞く人なりけりとをかしうて、

よるべなみ風のさわがす舟人も思はぬかたに磯づたひせずとて、はしたなめりとや。  
(真木柱巻)

近江君が夕霧にぶしつけに詠みかけた「おきつ舟…」詠について、諸注は一首の構成を、「……棹さしよらむ。とまり教へよ」と四句切れで理解した上で、次のように訳出している。

・ 沖に浮かぶ舟が寄港地もなく波に漂っているように、あなたが伴侶定まらず過しているのなら、私が近付きになつてさし

上げよう。今夜のお泊りを教えてほしい。  
(新大系)

・ 沖の舟が寄るべもなく波路にただようように、あなたのご縁談がきまらずにいらつしやるのなら、私が棹をさし寄せておそばにまいりましょう。どこにお泊りかその場所を教えてください。  
(新編全集)

通説の解釈が示すこのような大胆な誘いかけは、奇矯な行動の多い近江君ならば、確かにやりかねないものとも言える。

けれども、こうした解釈は、歌の表現に即して読む時、かなり不合理な解釈となっていることに気づく。「おきつ舟」は「よるべなみ路にただよ」っているのに、その舟に向つて、「とまり」(「よるべ」)を教えてくれと呼びかけるのは、いかにもおかしいだろう。

諸注は、「棹さしよらむ」の「む」を意志の意と判断している。しかしながら、「よるべなみ」と「とまり教へよ」との関係からみて、この「む」は婉曲の意ととるのが正しいだろう。「棹さしよらむ」は「とまり」にかかる連体修飾語であり、一首は、四句で切らずに、

沖の舟が寄るべもなく波路にただよっているならば、棹をさし寄せる泊りを教えてあげなさい。

と解するのが妥当である。この「とまり」は近江君自身の比喩である。「おきつ舟」「とまり」の比喩内容を踏まえた一首の解釈は次のようになる。

あのお方が縁談が定まらずにいるのなら、求愛すべき適当な相手を教えてあげなさい。その相手は私ですよ。  
ちなみに、夕霧の返歌、

よるべなみ風のさわがす舟人も思はぬかたに磯づたひせず  
は、近江君の歌の表現・発想にきちんと照応する表現でまとめられて  
いる。いかにもまめ人夕霧らしい律儀な歌といえるが、同時に  
容赦ない拒絶の歌となっている。語り手が「はしたなかめり  
や」と結ぶ所以である。

## 五

あやししく心おくれても進み出でつる涙かな、いかに思しつらん、  
などよろづに思ひゐたまへるほどに、御文あり、さすがにぞ見た  
まふ。こまやかにて、

つれなさばうき世のつねになりゆくを忘れぬ人や人にことな  
る

とあり。けしきばかりもかすめぬつれなさよと思ひつづけたまふ  
はうけれど、

かぎりとして忘れがたきを忘るるもこや世になびく心ならむ  
とあるを、あやしとうち置かれず、かたぶきつつ見ゐたまへり。

(梅枝巻)

雲井雁の返歌「かぎりとして…」については、従来、

そうするよりほかないとして、忘れがたいとおっしゃる私を  
お忘れになる、これも世間の人並になつたお心なのでしょう  
か。

(新編全集)

というように解されてきたが、前稿において、  
もう終わりだと思つて忘れがたいあなたを忘れる、これも世

間の趨勢に従うつれない心なのでしょうか。  
と解するのが正しいことを論述した。<sup>④</sup>

ここでは、夕霧の贈歌「つれなさば…」について、妥当な解釈  
を確認したいと思う。

従来、この歌は、

・あなたの冷たさは、つらいこの世のさだめのようにつつもの  
ことになってゆきますが、それでもあなたを忘れぬ私は、普  
通の人とは違うのでしょうか。  
(集成)

・あなたは憂き世のならいで私に冷淡になってゆくが、あなた  
を忘れない私は変り者なのだろうか。  
(新大系)

・あなたの冷淡なお気持は、つらい世の中の人並になつてゆく  
のに、そのあなたを忘れずにいる私は、人並の男ではないの  
でしょうか。  
(新編全集)

というように解釈されている。ここでは、「つれなさ」という語  
の意味を「あなたの冷たさ」「あなたの冷淡なお気持」のように、  
雲井雁の心についての限定された表現ととり、「うき世のつね」  
を、「つらい世の中の人並になつてゆく」の意と解している。そ  
の結果として、上の句の全体は、雲井雁が世間並みの人と同様に  
冷淡になつてゆく、の意と解されている。

しかしながら、「つれなさばうき世の常となりゆく」というの  
は、もつと一般的な表現であり、諸注のように、これを二人の関  
係のただけで理解して、相手の冷たさを嘆く表現として解するこ  
とには疑問がある。

下の句の「忘れぬ人や人にことなる」が、自分自身を一般的な  
人とは異なるものとして定位させる発想であることから見ても、



「世間なみに冷たくなるあなた↑普通の人とは異なる私」という対比よりも、「世間の冷淡なありかた↑普通の人とは異なる私」という対比のほうがすっきりする。またそのほうが、余分な言葉を補わない自然な解釈ともなるのである。

『紫式部集』には、

忘るるは憂き世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞわびぬる（七八）  
「ひさしくおとづれぬ人をおもひいでたるをり」という歌が収載されている。この歌の上句は、「忘れる」ということは憂き世の常態であると思うにつけても」の意を表しており、特定の誰かと自分との関係に限定されない、一般的な世人のありかたを述べている。

ひたすら世に亡くなりて後に恨み残すは世の常のことなり、  
それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを……（葵巻）

の「ひたすら……世の常のことなり」も、「死後にどこまでも怨恨をのこすのは世間にありがちのことだが」（新編全集）の意である。

右の用例と同様に、夕霧詠も、

（世が下って行くにつれ）冷淡さは憂き世の常態となつていくが、あなたを忘れない私は人とは違うのだろうか。

の意に解するのがよい。

通説の解釈は、相手の思いを疑い、自分の思いを訴えるという恋歌の常套的なやりとりに合わせての解釈なのであろう。けれども、夕霧と雲居雁の關係は、雲居雁の父大臣の反対によつて滞っているのであつて、雲居雁が夕霧に冷淡になっているということではない。「うき世のつねになりゆく」「つれなさ」に具体的な何かを

読み取ろうとするのなら、雲居雁ではなく、父大臣あるいは大臣邸の人々のことを念頭においていると理解するほうが、詠歌状況に適合するであらう。

## 六

なよびたる御衣ども脱いたまうて、心ことなるをとり重ねてたきしめたまひ、めでたうつくろひ化粧じて出でたまふを灯影に見出だして、忍びがたく涙の出で来れば、脱ぎとめたまへる単衣の袖を引き寄せたまひて、

「なるる身をうらむるよりは松島のおまの衣にたちやかへましなほうつし人にては、え過ぐすまじかりけり」と独り言にのたまふを立ちとまりて、「さも心憂き御心かな。

松島のおまの濡れ衣なれぬとてぬぎかへつてふ名を立ためやは

うち急ぎて、いとなほなほしや。

（夕霧巻）

### ①「あまの濡れ衣」

・松島の海女の濡れた衣は、濡れてなえてしまふ（私に馴れてしまふ）からといって、（私から尼衣へ）脱ぎ替えてしまふという評判を立ててよからうか。

（新大系）

・いくら長年連れ添つて私に飽きがきたからといって、私を見限つたという評判を立ててよいものでしょうか。

（集成）

一首を右のように理解する諸注の解釈は、雲居雁の「なるる身を……」の歌に引かれて、和歌の原文から乖離した解釈というべき



だろう。当該歌の「あまの濡れ衣」を贈歌の「なるる身」と同様の意味に解しうるとは思われない。

「濡れ衣」は、通常この言葉がもつ「事実反する噂」という意味を、ここでも表しているとするのが自然である。同じ夕霧巻での、夕霧と落葉の宮の贈答歌でも、二人の関係についての事実無根の噂の意味で使われている。

・ おほかたはわれ濡れ衣をさせずともくちにし袖の名やはかくるる  
(夕霧)

・ 分けゆかむ草葉の露をかごとにてなほ濡れ衣をかけんとや思ふ  
(落葉宮)

夕霧が、落葉の宮との関係について、雲居雁に弁明した言葉の中にも、「よからずもの聞こえ知らする人ぞあるべき」「いろいろ聞きにくきことどもほのめくめり。あいなき人（＝落葉の宮）の御ためにも、いとほしき」などとあった。当該歌の「濡れ衣」にも、これと同様の弁明を看取するのが妥当であろう。

## ② 「脱ぎかへつてふ名をたためやは」

この「……めやは」という言い方については、

・ 尼になつたと評判されるのもどうでせう。  
(全書)

・ 脱ぎかえたという噂は立たないほうがよいのではないか。  
(玉上評釈)

・ わたしを見捨てて尼になつたなどと噂されてよいものですか。  
(新編全集)

というふうに、「尼になろうか」と歌った雲居雁に対し、「～してよいものか、しないほうがよい」といさめる意味を表しているも

のと解釈されている。けれども、「めやは」という文末表現は、自らの意志を表す反語表現として用いられるのが通例である。

・ 笹の葉に置く初霜の夜を寒みしめはつくとも色にいでめやは  
(古今集・恋三・六六三・躬恒)

・ み吉野の大川のへの藤波のなみに思はばわが恋ひめやは  
(古今集・恋四・六九九・よみ人しらず)

・ かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさめやは  
(大和物語・一六八段)

・ 雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめやは  
(薄雲巻)

したがって、ここでも、詠者である夕霧が、「…と噂されるようなことはしない」という意志を表明しているものと解するのが自然である。その場合、「脱ぎかへつ」の主体も、雲居雁から夕霧に変更して解釈することになる。

「脱ぎかふ」を、集成は「私を見限つた」、新大系は「（私から尼衣へ）脱ぎ替えてしまふ」、新編全集は「私を見捨てて尼になつた」と、それぞれ解している。けれども、この言葉は、衣を別の衣に脱ぎ替えることを意味する動詞であるから、何かを捨てて別の何かに移ることの比喩となつた場合も、「何か」と「別の何か」は同質のものであるのが自然である。したがって、「私から尼衣へ脱ぎ替える」「私を見捨てて」という解釈は不自然である。

以上確認したような、「めやは」の語法と、「脱ぎかふ」の語義の双方を満たす解釈は、「あなたを見捨てて落葉の宮に移つたと噂になるようなことはしない」という解釈である。一首全体を訳出すれば、次のようになる。

濡れ衣が着なれて古びたということで、実際に落葉の宮を妻として、あなたを捨てたという評判を立てようか、いや立てたりはしない。

この場面に先立って、噂を聞いた花散里が、「三条の姫君の思さむことこそいとほしけれ。のどやかにならひたまうて」と心配しているのに対し、夕霧は、「などでかそれ（雲居雁）をもおろかにはもてなしはべらん」と答えた。この言葉は、夕霧の本心であり、当該歌の下句は、それをそのまま詠んだものとみられる。いくら気がせいじいたからといって、あなたから彼女に「脱ぎかへ」たりしないというのは、あまりに無粋な物言いと言わざるをえない。当該歌について、語り手が「なほなほしや」と手厳しく評するのも、むべなるかなである。

## 七

「御髪などおろいたまうてける、さる方にておはしまさましば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましや」など語らひたまふ。

君なくて岩のかげ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る  
中の宮、

奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば  
うらやましくぞまたも降りそふや。  
(椎本卷)

### ①「なにとかは見る」

大君の詠んだ「君なくて…」詠を、諸注は、

父君が亡くなつて山寺への嶮岨な道の往復が絶えてから、あなたはあの松の雪をどう思つて御覧になりますか。中の君に問ふ心。  
(全書)

という解釈に代表されるように、大君が中君に問い尋ねた歌と解している。

しかしながら、これは、大君が自身の心境を詠じてみせた歌と解するのが妥当である。

「なにとかは…」の類似表現「なにとかは…」は、問い尋ねる際に用いられる表現である。

・御息所の御方より、忘れ草をなむ、「これはなにかいふ」とてたまへりければ、  
(大和物語・一六二段)

・なまいどみてものなどいふ人のもとより、薦のいみじくもみぢたる葉に、「これはなにか見る」とて、おこせたりければ、  
(平中物語・一段)

これに対し、「なにとかは…」は、次の用例のように、専ら反語表現として用いられる。

・つれなき人の御心をば、何とかは見たてまつりとがめん。  
(初音卷)

・うつろはで行末遠き松のえは初秋かぜを何とかはさく  
(公任集・三四六・「御返し」)

・なにとかはいそぎもたたんなつごろもうき身をかふるけふにしあらねば  
(待賢門院堀河集・一二・「ころもがへ」)

・何とかは人にも今はかたるべき身のうきほどはよそにみゆらん  
(続拾遺集・雑中・一一九〇・侍従能清・「述懐歌とて」)

中でも能清詠は、後世の用例だが、以前と今との対比を行い、「今となつては……しない」という現状、あるいは、「今となつては……してもしょうがない」という感慨を詠んでおり、八宮生前の当時と現在とを対比している当該歌の解釈の参考になる。

## ②「松の雪」

大系は、「松の雪」を眺める行為について、「父宮の山寺からの御帰りを待ちながら眺めていた松の雪」と解し、「松」に「待つ」を掛けた」と注する。

同じように掛詞を指摘するのは、玉上評釈、新大系、新編全集である。

・……それに、松の雪は、誰かを待つ、というひびきもあるではないか。それなのに、「消えにし人」は、消えたまま帰つて来ない。いくら待つても甲斐ないのである。（玉上評釈）

・「松」に「待つ」をひびかせ、どんなに待とうとも父宮は帰らぬ、の思いをもこめる。（新大系）

・「松」に「待つ」をひびかし、父宮との出会いを心待ちするような慕わしさをこめながら、松の雪をなんと見るかと問いたずねる。（新編全集）

これに対し、集成は、

松に降り積む雪も、あなたは何とご覧になりますか。それをもせめては父宮の形見と見たいという含意であらう。

として、掛詞を認めないが、「松」に「待つ」を掛けるのは常套的な技法であり、当該歌の「松」から「待つ」への連想を排するのは不自然である。

新編全集がいうように、姉妹は、「松」に「父宮との出会いを心待ちするよう慕わしき」を感じていたものと思われる。ただそれは、玉上評釈・新大系にいうように、八宮の生前のことであつたであらう。「松の雪をも何とかは見る」という反語の構文は、八宮の生前は、松を眺めながら、父宮の帰りを心待ちにしたものだが、今は、待つこともなく、松を見てもむなしいだけだという思いを表現している。

では「雪」はどうか。諸注は一首の解釈に際して、この雪について特に注意を払っていない。例外的に集成は、「はかないもの」という説明を付している。けれども、この「雪」についても、八宮の生前と死後との差異に注目しなくてはいけないであらう。

「雪」は、八宮の生前は、八宮の帰宅を妨げるもの、寺と邸との心理的な距離を遠ざけるものとして眺められていたのであらう。けれども、八宮の帰宅を待つこともなくなった今となつては、雪を見ても切なく眺めることはない、というのが、一首の含意であらう。

以上をまとめるに、一首の解釈は次のようになるであらう。

父宮が存命中は、松に雪がつもつたのを見て、道が途絶えてしまふのではないかと心配し、また父宮を待つ思いを募らせたりしたものだが、今となつては、松の雪をそのような思いで見ることもなくなった。

## 注

(1) 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』（以下「新編全集」と略称する）により、一部表記を改めた。他の

諸注釈書に言及する場合は、以下の略称を用いる。「全書」（＝

一一年七月）。

（かとうむつみ 本学教授）

『日本古典全書』、「大系」（＝『日本古典文学大系』）、「全集」（＝『日本古典文学全集』）、「玉上評釈」（＝玉上琢弥『源氏物語評釈』）、「集成」（＝『新潮日本古典集成』）、「新大系」（＝『新日本古典文学大系』）。

（2）『物語の和歌』（『源氏物語講座1』一九九一年）。

（3）『源氏物語』作中歌でも、「根」は血縁関係を示すのが通例である。

・生ひそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をならべん  
（薄雲巻）

・ひきわかれ年は経れども鶯の巢だちし松の根をわすれめや  
（初音巻）

・やまがつの垣ほに生ひしなでしこのもとの根ざしをたれかたづねん  
（常夏巻）

・命あらばそれとも見まししれぬ岩根にとめし松の生ひす  
（橋姫巻）

（4）『源氏物語』の和歌を読む（五）（『立教大学日本文学』

一〇七号、二〇一二年一月）。関連する一連の拙稿は以下の通り。『源氏物語』の和歌を読む（二）（『立教大学大学院日本文学論叢』九号、二〇〇九年八月）、『源氏物語』の和歌を読む（二）―夕顔の花をめぐる贈答歌―（『立教大学日本文学』一〇四号、二〇一〇年七月）、『源氏物語』の和歌を読む（三）―朝顔の花をめぐる贈答歌―（『立教大学大学院日本文学論叢』一〇号、二〇一〇年八月）、『源氏物語』の和歌を読む（四）（『立教大学日本文学』一〇六号、二〇